



佐藤 優

「読まずにはいられない」  
1968年を巡る  
現代の『太平記』

1968年の青年反乱を包括的に分析した優れた研究書である。これまでこの問題については、多くの著作が発表されてきた。しかし、党派の立場からの記述がほとんどで、それ以外の出来事の表層をジャーナリスティックな視点から扱ったものはかりだ。一般の読者にはアクセスすることができないが、公安警

察、公安調査庁が作成したこの問題に関する膨大な調査資料集がある。筆者は外務省のインテリジェンス部局に勤務したので、「取扱注意」、「部内参考資料」、「秘（無期限）」などの印が押されたこれらの資料を読むことができた。日本の国家体制を維持するという観点から、まず共産党、新左翼の内論理を知るとい

観点で書かれた優れた調査や資料集の解説があった。本書は、これまで刊行された著作や作成された調査とは本質的に異なる学術的分析だ。小熊氏はあの出来事をこう評価する。

（筆者は「あの時代」の叛乱を、一過性の風俗現象とはみなしていない。だが、一部の論者が主張するような「世界革命」だったともみなしていない。結論からいえば、高度成長を経て日本が先進国化し

つつあったとき、現在の若者の問題とされている不登校、自傷行為、摂食障害、空虚感、閉塞感といった「現代的」な「生きづらさ」のいわば端緒が出現し、若者たちがその匂いをかぎとり反応した現象と考えている（上14頁）

小熊氏が自分の頭で考えた誠実な分析だ。共感する。全共闘運動について（彼らは人生の「レール」からはみだす決意はあったわけがなく、一時的なモラトリアム期間を

『1968』（上・下）

小熊英二著

（各6800円＋税／新曜社）

上下巻あわせて2000頁を超える大書

photo 篠塚ようこ

楽しみたかったのだといえなくもない（下825頁）という指摘も本質をついていると思う。ただし、人間は深く考えず、たいたした決意をもたないときに、勢いで過激な行動をとり、他者を殺し、自ら破滅の道を歩む。『太平記』は南北朝動乱の死者を鎮魂するために書かれた。本書を青年反乱で眺めた人々の魂をなぐさめる現代の『太平記』であると評者は受け止めた。

さとう・まさる◆作家・元外務省主任分析官  
『自壊する帝国』で新潮ドキュメント賞、大宅一ノノフィクション賞を受賞。